

エリザベスは チョコバーがお好き

②

小川典子

意

外なことだが、英国には演奏会を開けるコンサート会場の数が少ない。従って私ひとりで演奏する「ピアノリサイタル」などは、学校の講堂を借りて行われることが多い。

英国人は四・五歳で就学する。が、そのシステムは至極複雑。小学生として学ぶ年数が学校によって違えば、いつから中学生なのかもはっきりしない。さらに不思議なのは、英国人の小・中学校・高校にこだわる様子である。最終学歴よりも、どの中学校で教育されるか、が各界のトップを目指す階級にとって格別に重要だからである。生まれ

る前に、父親が自分の通った名門私立パブリックスクールに子どもの入学予約をする。これは、中・上流階級のなかで広く推奨されている。「我が校卒業生であるあなたのご子息なら安心です」。公立高校から成績優秀で一流大学に進学するのをよしとした我が国とは、肌合いが違ふ。

英

国で校章を示すものは、男子制服のネクタイ。それを見れば「何々校の何年卒」が一目瞭然(ryōran)なのだ。それを英国のエリートたちは「オールド・スクール・タイ」(愛すべき校章ネクタイ)と呼んで、大いに活用する。大学入試や就職試験

の面接、取引先での根回し：オールド・スクール・タイを分かち合ったもの同士であれば、瞬時にネットワークが広がる。



橋爪拓治撮影

つ。あらゆる境遇の子どもたちがいるなか、現在では学力を向上させてパブリックスクールを追いつくという勢いづく学校も多い。先日、名門私立校と、自由奔放な公立校の子どもと一緒に学ばせた日のことが紹介されていた。私立の子が「キミの学校へ行くのに(学費は)いくらかかる

数週間前、ある名門男子校でリサイタルを弾いた。終演後のシャンパン・パーティーで、校長先生に尋ねてみた。オールド・スクール・タイとは？…一瞬、意外な質問に驚きを示しながら、それは人とのつながりを広げる早道の象

徴、と言えるでしょう、と笑顔で答えてくれた。そして「我が校では生後三カ月の乳児から扱っています」とも。父親が、母校で熱心に息子の入学予約をする様子が目に浮かぶ。女子教育の歴史が浅いため、学校にまつわる古くからの表現は、オールド・スクール・タイのように男子中心だ。

て、庶民派は、と言うと、ステートスクールと呼ばれる公立学校で育

の」と尋ねたところ、公立の子は無邪気に「バス代の五十ペンス」と答えたと言う。公立校出身の私に、このかわいらしいエピソードは温かく響く。次世代をしょって立つ子どもたちに、セルフメイドなどと呼ばせない、階級を打破する猛烈な力で、まい進してほしい。そう願いをこめずにはいられなかった。

(おがわ・のりこ ピアニスト、毎週木曜掲載)